

2.5 [火]

第21回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール／19時30分開演(19時00分から解説)
Yomikyo Ensemble Series, No. 21
Tuesday, 5th February 19:30 (Pre-concert talk from 19:00) / Yomiuri Otemachi Hall

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《小森谷巧リーダーによる室内楽》

ヴァイオリン／小森谷巧 (読響コンサートマスター)、太田博子

Violin TAKUMI KOMORIYA (YNSO Concertmaster), HIROKO OTA

ヴィオラ／柳瀬省太 (読響ソロ・ヴィオラ) チェロ／遠藤真理 (読響ソロ・チェロ)

Viola SHOTA YANASE (YNSO Solo Viola) Cello MARI ENDO (YNSO Solo Cello)

コントラバス／大槻 健 (読響首席) オーボエ／辻 功 (読響首席)

Double Bass KEN OTSUKI (YNSO Principal) Oboe ISAO TSUJI (YNSO Principal)

クラリネット／金子 平 (読響首席) ファゴット／岩佐雅美

Clarinet TAIRA KANEKO (YNSO Principal) Bassoon MASAMI IWASA

ホルン／日橋辰朗 (読響首席)

Horn TATSUO NIPPASHI (YNSO Principal)

ナビゲーター／鈴木美潮 (読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員)

Navigator MISHIO SUZUKI

モーツァルト オーボエ四重奏曲 ヘ長調 K.370 [約15分]

MOZART / Oboe Quartet in F major, K. 370

- I. Allegro
- II. Adagio
- III. Rondo : Allegro

[休憩 Intermission]

シューベルト 八重奏曲 ヘ長調 D803 [約60分]

SCHUBERT / Octet in F major, D803

- I. Adagio - Allegro
- II. Adagio
- III. Allegro vivace - Trio
- IV. Andante
- V. Menuetto : Allegretto
- VI. Andante molto - Allegro

文化庁委託事業「平成30年度 戦略的芸術文化創造推進事業」

[主催] 文化庁、読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団



2.9 [土]

第214回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール／14時開演
Saturday Matinée Series, No. 214
Saturday, 9th February, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

2.10 [日]

第214回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール／14時開演
Sunday Matinée Series, No. 214
Sunday, 10th February, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／小林研一郎 (特別客演指揮者)

Special Guest Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHI P.6

ヴァイオリン／タムシン・ワリー＝コーエン

Violin TAMSIN WALEY-COHEN P.8

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ウェーバー 歌劇《オベロン》序曲 [約9分] P.9
WEBER / "Oberon" Overture

チャイコフスキー ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35 [約33分] P.10
TCHAIKOVSKY / Violin Concerto in D major, op. 35

- I. Allegro moderato - Moderato assai
- II. Canzonetta : Andante
- III. Finale : Allegro vivacissimo

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 《運命》 [約31分] P.11
BEETHOVEN / Symphony No. 5 in C minor, op. 67

- I. Allegro con brio
- II. Andante con moto
- III. Allegro - IV. Allegro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[共催] 東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会



2.14 [木]

第619回 名曲シリーズ
サントリーホール/19時開演

Popular Series, No. 619
Thursday, 14th February, 19:00 / Suntory Hall

2.16 [土]

第109回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール/14時開演

Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 109
Saturday, 16th February, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮/小林研一郎 (特別客演指揮者)

Special Guest Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHI P.6

ピアノ/牛田智大 Piano TOMOHARU USHIDA P.8

コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

チャイコフスキー ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23 [約32分] P.12
TCHAIKOVSKY / Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23

- I. Allegro non troppo e molto maestoso - Allegro con spirito
- II. Andantino semplice
- III. Allegro con fuoco

[休憩 Intermission]

ブラームス 交響曲 第2番 ニ長調 作品73 [約43分] P.13
BRAHMS / Symphony No. 2 in D major, op. 73

- I. Allegro non troppo
- II. Adagio non troppo
- III. Allegretto grazioso (Quasi Andantino)
- IV. Allegro con spirito

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 [協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社 (2/14)
 [助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
 独立行政法人日本芸術文化振興会
 [協力] 横浜みなとみらいホール (2/16)

※2月14日公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。



2.22 [金]

第585回 定期演奏会
サントリーホール/19時開演

Subscription Concert, No. 585
Friday, 22nd February, 19:00 / Suntory Hall

指揮/ローター・ツァグロゼク Conductor LOTHAR ZAGROSEK P.7

特別客演コンサートマスター/日下紗矢子
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

リーム Ins Offene... (第2稿/日本初演) [約27分] P.14
RIHM / Ins Offene... (Second Version, Japan premiere)

[休憩 Intermission]

ブルックナー 交響曲 第7番 ホ長調 WAB107 (ノヴァーク版) [約64分] P.16
BRUCKNER / Symphony No. 7 in E major, WAB107 (Nowak edition)

- I. Allegro moderato
- II. Adagio. Sehr feierlich und sehr langsam
- III. Scherzo : Sehr schnell
- IV. Finale : Bewegt, doch nicht schnell

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 [助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
 独立行政法人日本芸術文化振興会
 [協力] アフラック



小林研一郎

(特別客演指揮者)

Ken-ichiro Kobayashi

名匠が聴かせる
入魂のドイツ音楽



©読響

読響の特別客演指揮者を務める名匠が、ベートーヴェン〈運命〉とブラームスの交響曲第2番という、二つの名作で熟練のタクトを振るう。読響サウンドを知り尽くしたマエストロが響かせる、歓喜のフィナーレが楽しみだ。若き

二人のソリストとの共演にも注目したい。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科及び指揮科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。ハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任。2002年5月の「プラハの春音楽祭」オープニングコンサートの指揮者に、東洋人として初めて起用されたほか、ハンガリー政府より民間人最高位の“星付中十字勲章”を授与された。11年、文化庁長官表彰受賞。13年、旭日中綬章を受章。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、九州響の名誉客演指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学およびリスト音楽院（ハンガリー）名誉教授。東京文化会館音楽監督、長野県芸術監督団の音楽監督を務めており、今年4月には群馬響のミュージック・アドバイザーに就任する。

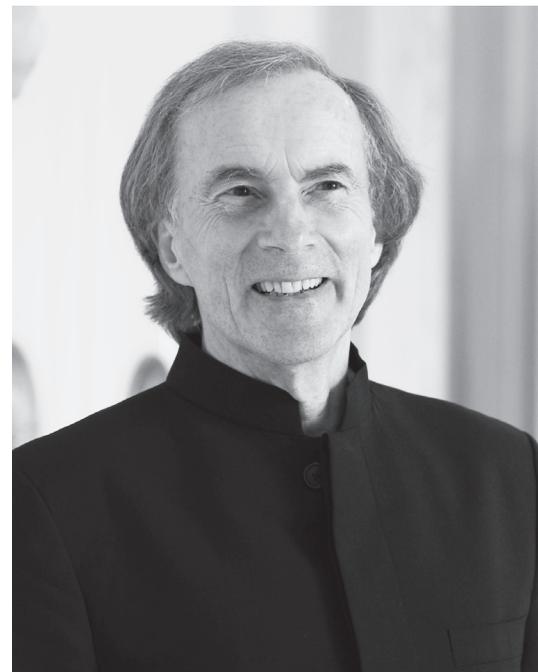
録音の分野では、14年4月から読響と取り組んだブラームスの交響曲全集が絶賛を博している。

- ◇ 2月9日 土曜マチネーシリーズ
- ◇ 2月10日 日曜マチネーシリーズ
- ◇ 2月14日 名曲シリーズ
- ◇ 2月16日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

ローター・ツァグロゼク

Lothar Zagrosek

待望の再共演
巨匠のブルックナー



©Christian Nieling

ドイツの巨匠が3年ぶりに読響の指揮台に上がる。初登場の2016年には、ブラームスやベートーヴェンで力強く剛毅な演奏を聴かせて好評を博した。今回はリーム作品を日本初演し、ブルックナーの傑作を指揮する。

1942年ドイツ・バイエルン州生まれ。H. スワロフスキー、B. マデルナ、カラヤンらに師事。パリ・オペラ座、ライプツィヒ歌劇場の音楽総監督、ベルリン・コンツェルトハウス管の首席指揮者などを歴任。97年にシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督に就任し、ノーノやラッヘンマンの現代オペラやワーグナーの〈指環〉4部作などを指揮して絶賛された。2006年までの在任期間に、同歌劇場は権威ある専門誌『オーパヴエルト』の年間最優秀歌劇場に5度選ばれた。なお、同誌の年間最優秀指揮者には計3度選出されている。これまでにベルリン・フィル、フラ

ンス国立管などを指揮。ウィーン国立歌劇場、ハンブルク歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、ザルツブルク音楽祭などで活躍。近年では、16年にケルン歌劇場で指揮したブラウンフェルススの歌劇〈ジャンヌ・ダルク〉が話題となったほか、17年にフランクフルト歌劇場でのクルシェネクの〈オペラ3部作〉が高い評価を得た。

録音は数多く、シュレーカーの歌劇〈烙印を押された人々〉をはじめとするデッカ・レーベルの「退廃音楽」シリーズのほか、ラッヘンマンの歌劇〈マッチ売りの少女〉などがある。

◇ 2月22日 定期演奏会



©Patrick Allen, operaomnia.co.uk

ヴァイオリン タムシン・ワリー=コーエン

Violin Tamsin Waley-Cohen

2015年に権威ある新人賞“エコー・ライジング・スター賞”を受賞した新星。これまでにリットン、V. ペトレンコらの指揮で、チェコ・フィル、ロンドン・フィル、ハレ管、ロイヤル・フィル、ロイヤル・リヴァプール・フィルなどと共演したほか、アムステルダム・コンサートヘボウ、ロンドン・ウィグモアホール、オールドバラ音楽祭などに出演。数々の録音をリリースしており、「ハリス／アダムズ：ヴァイオリン協奏」は『グラモフォン』誌で「ここ数年で最も魅力的な協奏曲録音の一つ」と絶賛された。読響初登場。

◇2月9日 土曜マチネーシリーズ
◇2月10日 日曜マチネーシリーズ



©Ariga Terasawa

ピアノ 牛田智大

Piano Tomoharu Ushida

1999年いわき市生まれ。3歳でピアノをはじめ、5歳で上海のコンクールで優勝。8歳から5年連続でシヨパン国際ピアノコンクール in ASIAで第1位受賞。2012年に浜松国際ピアノアカデミー・コンクールにて最年少第1位受賞。同年、日本人ピアニストとして最年少でユニバーサルよりCDデビューを果たした。18年11月の浜松国際ピアノコンクールでは、第2位及び聴衆賞を受賞。これまでにプレトニョフ、カスプシクラ巨匠の指揮で、ウィーン室内管、ロシア・ナショナル管、ハンガリー国立フィルなどと共演している。

◇2月14日 名曲シリーズ
◇2月16日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

2.9 [土]

2.10 [日]

オヤマダアツシ・音楽ライター

ウェーバー
歌劇〈オベロン〉序曲

作曲：1825～26年／初演：1826年4月12日、ロンドン／演奏時間：約9分

ベートーヴェンも扉を開いた一人とされるドイツ・ロマン派音楽。歌劇や劇付随音楽の分野においてはワーグナーに先んじて足跡を残したカール・マリア・フォン・ウェーバー（1786～1826）だが、ロンドンのロイヤル・オペラ・ハウスから委嘱を受けた歌劇〈オベロン、または妖精の王の誓い〉は彼にとって“最後の輝き”を放つ一作となった。題名のオベロンとは、シェイクスピアの戯曲『夏の夜の夢』にも登場する妖精の王。オペラ化に際して台本のベースとなったのは、中世から伝わるロマンスをもとに作られたクリストフ・マルティン・ヴィーラント作のドイツ語叙事詩である。妖精たちが人間たちの色恋沙汰を面白がって試練を与え、ハッピーエンドで幕を閉じる

という物語はまさに『夏の夜の夢』を想起させるが、ロンドンの聴衆に親しまれることを想定して選ばれた題材だったかもしれない。

序曲は、同じ作曲家の〈魔弾の射手〉と並んで人気が高い。神秘的に始まる序奏部分は妖精の森の情景であり、オベロンが吹く角笛（ホルン）も聞こえてくる。アレグロ・コン・ブリオの主部に入ると、第2幕で歌われる四重唱「紺碧の波の上、広い海原を越えて」の旋律（弦楽）、第1幕で騎士ヒュオンが歌うアリア「子供の頃から鍛えてきたのだ」（クラリネット）、彼と結ばれるレツィアが第2幕の遭難シーンで歌う名アリア「海よ、大いなる怪物よ」（弦楽）、海の嵐を描写する音楽などが次々に演奏されていく。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

チャイコフスキー ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

作曲：1878年／初演：1881年12月4日、ウィーン／演奏時間：約33分

作曲家の人生は言うまでもなく人それぞれだが、ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）の場合は、まるで彼が敬愛したレフ・トルストイの長編小説のように劇的だったといえるだろう。特に、そのトルストイと親交を深め、14年におよぶ経済的・精神的支援を与えてくれたナジェージダ・フォン・メック未亡人との文通が始まった1876年（36歳）から、短く不幸な結婚騒動、それに伴うスキャンダルと国外逃避へと至った1879年頃までは、嵐のような日々だったことも、残された手紙などからうかがえる。

しかしその期間に、歌劇〈エフゲニー・オネーギン〉、交響曲第4番、そしてヴァイオリン協奏曲といった名作が生まれたことは特筆に値するだろう。現実から逃げたいという切迫感が創作へと向かわせたのか、チャイコフスキーにプレッシャーをエネルギーへと変換する強い心があったのかは不明なもの、彼の苦難によって私たちはこうした名作を味わうことができるのである。

ヴァイオリン協奏曲は、スキャンダ

ル（と妻）から逃亡していたスイスのクラランという街で、エドゥアルド・ラロが作曲した〈スペイン交響曲〉（実質的なヴァイオリン協奏曲）のスコアを研究したことから発案。1878年の3月から4月にかけて、わずか25日ほどでスコアまでを仕上げたのである。しかし初演までには、独奏を依頼するつもりだったレオポルト・アウアーに断られるなどあって、約3年が経過。モスクワ音楽院の教授を務めていたアドルフ・ブロッキが作品に理解を示し、彼の独奏、ハンス・リヒターの指揮で1881年12月によく陽の目を見たのである（しかし、聴衆からも批評筋からも不評だった）。結果的に現在のような人気を得るまで、チャイコフスキーは何年か待たされることになる。

第1楽章 ニ長調、序奏＋ソナタ形式の主部。後半に独奏者のカデンツァを有する。

第2楽章 ト短調、三部形式。「カンツォネッタ（小さな歌）」と題された叙情的な楽章。休みなく次の楽章へ。

第3楽章 ニ長調、ロンド形式。民俗舞曲風のフィナーレ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉

作曲：1807～08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）に関する書籍は、本当に多い。本格的な研究書はもちろん、小説を含むノンフィクションやコミックなども含めれば、現時点で入手できる（＝絶版になっていない）ものだけでも相当数があるはずだ。

生誕250年となる2020年に向けて、ますます増えることが予想されるものの、一人の音楽家がこういった形で人生や作品の背景などを深掘りされるのはとても興味深い。昨年秋には、秘書を務めていたアントン・シンドラーに光を当て、難聴だったベートーヴェンの必需品である会話帳に加筆などの細工をしたのではないか、という疑惑をテーマにした書籍も出版された。そうしたことも含め、まだまだ謎多き作曲家だということだろう。

そのシンドラーが「『運命とは、このように扉を叩くのだ』と先生はおっしゃっていた」と証言したことで、〈運命〉というニックネームが付けられた交響曲第5番。現在はその証言に対する信憑性が薄れているものの、第1楽章冒頭（いわゆる「運命の動機」）の衝

撃的な印象は変わらず、さらにはその短い動機が全4楽章を支配していくという構想だけでも、ベートーヴェンの異端ぶりは証明される。

1807年には、同日に初演される〈田園〉（交響曲第6番）などと一緒に本格的なスケッチが始まっており、1808年の2月頃には完成（実は1804年頃に着手されていたものの完成には至らなかった）。同年末にウィーンのアム・デア・ウィーン劇場で長時間の自主コンサートが開催され、そこで〈合唱幻想曲〉ほかと初演されたことは広く知られている。

第1楽章 ハ短調、ソナタ形式。「運命の動機」を軸とした劇的な音楽。

第2楽章 変イ長調、変奏曲を内包したソナタ形式。二つの主題を軸とした変奏曲による楽章。

第3楽章 ハ短調、複合三部形式。「運命の動機」を変形させた主題が軸となるスケルツォ。休みなく次の楽章へ。

第4楽章 ハ長調、ソナタ形式。トロンボーンとピッコロが加わり、勝利への前進を思わせる英雄的な音楽が鳴り響く。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

2.14 [木]

2.16 [土]

小室敬幸 (こむろ たかゆき)・作曲、音楽学

チャイコフスキー
ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23

作曲：1874～75年（1879/88年改訂）／初演：1875年10月25日、ボストン／演奏時間：約32分

法務省で働いていたにもかかわらず、22歳で音楽院へ入学したピョートル・チャイコフスキー（1840～93）。26歳で交響曲、28歳でオペラを完成させることで、遅咲きではあるが、作曲家としての第一歩を踏み出していく。

30代半ばを迎えたチャイコフスキーは、次なる一手としてピアノ協奏曲の作曲を思いつく。師の弟であり、自身にとっては勤める音楽院の上司でもあるニコライ・ルビンシテイン。名ピアニストとして名を馳せた彼に独奏を務めてもらうことを前提に筆が進められたが、ニコライは全面的に書き直すようにと酷評。結局は、ドイツの名ピアニスト・指揮者、ハンス・フォン・ビューローが初演を行った。のちにニコライもレパートリーに加えたが、チャイコフスキーは過去の遺恨を許しておらず、そのことを大いに皮肉っている。

第1楽章は全曲の半分以上を占める長大な楽章で、あまりにも有名な旋律

による3～4分ほどの序奏ではじまる。ピアノがウクライナ民謡に基づく、跳ねるようなリズムをもつ物悲しい主要主題を奏でるところからが主部となり、その後の木管楽器による哀願するような旋律が副次主題として対比されていく。破滅的な最初のクライマックスを築いたのち、弦楽器による穏やかな旋律がなだめるように現れる。こうして登場してきた旋律が絡み合いながら、その後のドラマティックな音楽が構築されていく。第2楽章は、緩一急一緩の三部形式になっており、フルートが先導するノスタルジックな旋律と、ピアノが駆け巡る軽やかな音楽が対比される。第3楽章でも、民俗色豊かな踊りを想起させるウクライナ民謡が主要主題となり、繰り返し楽曲に登場。その合間に明るくも叙情豊かな旋律が挟み込まれる。そして、この叙情的な旋律が、最終的なクライマックスを形作っていく。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ブラームス
交響曲 第2番 ニ長調 作品73

作曲：1877年 夏／初演：1877年12月30日、ウィーン／演奏時間：約43分

チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を酷評したのは、前述したニコライだけではない。ヨハネス・ブラームス（1833～97）の親友のヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムもそのひとりであった。一方のチャイコフスキーも、ブラームスのヴァイオリン協奏曲について、詩情がないのに深遠ぶっているとバツサリ。チャイコフスキーにとっては、心ほだされるような旋律が存在しないも同然だったのだ。

ブラームスの旋律がチャイコフスキーと性格を異にするのは、音楽としての展開しやすさを優先しているため。本作の場合、第1楽章冒頭でチェロとコントラバスが奏でる三つの音（レ・ド#・レ）というシンプル極まりない、旋律というよりも単なる音の動きをつかって、全4楽章をまとめあげているのだ。ただし、そうした論理性だけでこの音楽が説明できるわけではない。遅筆で知られるブラームスが次々と作品を書き上げていった、生涯で最も充実していた時期であること。風光明媚な湖畔で、豊かな自然を意識しつつ書かれた作品であることが、音楽からにじみ出ているのを感じられるはずだ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

ソナタ形式による第1楽章は、前述したように冒頭の3音が全曲を統べる素材として現れる。例えば、前奏的なセクションが終わったのちに登場する第1ヴァイオリンが奏でる主要主題でも、冒頭3音の動きは共通しているのだ。チェロが哀愁豊かに歌う副次主題が絡みながらも、あくまで冒頭3音の動きが執拗に繰り返されていくことで劇的な音楽を構築していく。緩徐楽章となる第2楽章でもソナタ形式の要素が取り入れられ、グラデーシヨンのように移ろいながらドラマを築きあげる。第3楽章は急速なスケルツォとなるのが通例なのだが、牧歌的な音楽が主部として何度も登場。その合間に、本来のスケルツォ的な音楽が挟み込まれるという逆転構造をとっている。再びソナタ形式による第4楽章は冒頭、弦楽器によって提示される主要主題が軸となっていくが、これは第1楽章の旋律を変形させたもの。今度は冒頭の4音を取り出して、執拗に繰り返していく。第1ヴァイオリンの低音で提示される副次主題と対比させながら、最後まで駆け抜ける。

江藤光紀(えとう みつのり)・音楽評論家

リーム

Ins Offene... (第2稿/日本初演)

作曲:1992年8月/初演:1995年1月18日、サンタ・クルス(カナリア音楽祭)/演奏時間:約27分

ヴォルフガング・リーム(1952～)は、ドイツの戦後世代を代表する重鎮作曲家である。ギムナジウム(中等教育機関)在籍時より作曲をはじめ、地元カールスルーエ音大を卒業した後は、ケルンのカールハインツ・シュトックハウゼン、フライブルク音大のクラウス・フーバー、ハンス・ハインリッヒ・エッケブレヒトなどに学んだ。

リームは主知主義的な戦後アヴァンギャルドの洗礼を受けて、そのアンチテーゼから出発し、早くから旺盛な創作活動を行った。1974年にドナウエッシンゲンの現代音楽祭で発表した〈モルフォニー〉は表現主義的ともいえる音の身振りで話題となり、当初その作風は「新しい単純性」「新ロマン主義」などといった用語で説明された。しかし弦楽四重奏をはじめとする室内楽や管弦楽曲はもとより、ドイツ・ロマン派の詩に付曲した歌曲や、〈メキシコの征服〉をはじめとするオペラに及ぶ400以上の膨大な作品を、単一の

イズムやキーワードでくくることはできないだろう。電子音や特殊奏法ではなくトラディショナルな書法を基本として、文学や美術など幅広い教養を背景に、重厚な作品を^う倦むことなく書き続ける。加えて教育や文筆にも活躍する姿は、むしろゲーテ以来のドイツの理想的知識人像^{ほうふつ}を彷彿させる。

〈Ins Offene...〉はスコティッシュ・ナショナル管の委嘱により、1990年にグラスゴーで初演された。この初稿は改訂を施され、ポローニャで92年6月に再演されている。今回演奏される第2稿は92年8月に完成し、95年にサンタ・クルスのカナリア音楽祭でチェコ・フィルにより初演された。指揮を受け持ったのは、のちに読響第7代常任指揮者となるゲルト・アルブレヒトである。初稿と第2稿は編成や基本的な流れに大きな相違はないが、第2稿ではオーケストレーションがより豊かになり、反復記号が書き足され、速度指示なども細やかになっている。リー

ムは改訂初稿も演奏可能としており、作品を完成された個別のものではなく、改変・選択可能なものとする姿勢もまた、作曲当時のポストモダンな時流を反映している。

3群に分けられた39人の音楽家によって演奏される。第1グループは、ヴァイオリン2、トランペット3、打楽器3で、奏者たちは客席を高いところから取り囲むように配置される。第2グループは、舞台向かって右に配置されたピッコロ3、クラリネット3、ホルン3、トロンボーン3、打楽器1、ヴィオラ2、チェロ6。第3グループは、舞台左のバスクラリネット、コントラファゴット、チューバ、ハープ、ピアノ、打楽器(いずれも各1)、そしてコントラバス4。

作曲家の関心が、一般的な意味での楽曲のドラマトゥルギーよりも、音色の変化、音響空間のデザインなどに注がれていることは、一聴すれば明らかだろう。客席を囲む3人の打楽器奏者が弓で弾くアンティーク・シンバルがメタリックな高音を発し、第1グループのヴァイオリンや第2グループのピッコロと絡みながら、ニュアンスの変化や陰影をもたらす。この緊張感はトランペットをはじめとする様々な楽器

へさざ波のように広がり、揺らぎや寄せては返す波動となって音響のペースベクティブを作っていく。

ヴィブラフォンをはじめとする打楽器の多彩な打撃音、ハープやピアノのアクセントが点描風に彩るが、楽曲のちょうど真ん中あたりで一定のパルスが聴かれる以外には、明確な拍節感は避けられている。結尾部ではびんと張った高音の持続に、舞台上の二人の打楽器奏者がアンティーク・シンバルで加わる。近接した音程で鳴る高音は、相互に陰りや浮き沈みとして感じられるかもしれない。

タイトルの「ins offene...」(スコアのタイトルはすべて小文字表記)とは「開いた…の中へ」という程度の意味である。そこに、ある構造や形式をもった固定的な作品像を解体し、様々に重ね書きされ、変化しうる開かれた音響体を見ることも可能だろうし、また一方、どことも知れない彼方からやってきた音が、また元の静寂の中に溶け込んでいくような、時の流れへの開かれを考えてもいいだろう。あるいは重なり、溶け合い、反発し、こだましあう音のポエジーに向かって自らの感覚を開く、響きの現象学として受け止めることもできるだろう。

楽器編成/ピッコロ3、クラリネット3、バスクラリネット、コントラファゴット、ホルン3、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、打楽器(大太鼓、小太鼓、アンティーク・シンバル、トライアングル、シロフォン、ヴィブラフォン、ウッドブロック、トムトム、ボンゴ、ギロ、ゴング、銅鑼)、ハープ、ピアノ、弦楽器(ヴァイオリン2、ヴィオラ2、チェロ6、コントラバス4)

ブルックナー 交響曲 第7番 ホ長調 WAB107 (ノヴァーク版)

作曲：1881～83年／初演：1884年12月30日、ライプツィヒ／演奏時間：約64分

リンツ近郊の学校教師のもとに生まれたアントン・ブルックナー（1824～96）は、小さいころから音楽の才能を発揮した。早くに父を亡くしてからはザンクト・フローリアン修道院の聖歌隊に預けられたが、その後は教員を務めるなど、すぐに作曲家として歩み始めたわけではなかった。リンツの大聖堂にオルガニストとして勤めたのは31歳で、“音楽の都”ウィーンに出てくるころには44歳になっていた。しかも、その名声はもっぱらオルガニストとしてのもので、作曲家としてはほとんど無名だったのである。

ウィーンでは作曲に力を入れ、50歳前後で第3番から第5番までの交響曲が次々に書き下ろされるが、長大で武骨な作風はなかなか受け入れられず、上演の機会を探るブルックナーは指揮者や弟子の助言を入れつつ、長い自作改訂の時期に入る。

そんなわけで交響曲第7番を手掛けるころには50代後半になっていたが、この曲は楽想や構成の上でも、第8番、第9番という晩年の飛翔を予感させる熟練と深まりを見せている。

1881年9月、第6番を完成させた余勢を駆ってとりかかり、82年に第1楽

章と第3楽章を仕上げた後、第2楽章へと筆を進めた。この世ならぬ深みと美しさを湛えたこのアダージョ楽章は、ワーグナーの死の予感のもとに書かれた。1873年に交響曲第3番を献呈して以来、ブルックナーはたびたびバイロイトにこの作曲家を訪ねており、ヴェネツィアで療養中の大家が長くないだろうことを察していた。死の報せが入ると、アダージョの仕上げに入っていたブルックナーは、4本のワーグナー・チューバによる哀切に満ちた葬送音楽を書き加えた。9月に全曲を完成させた後には、バイロイトに墓参している。この曲を特徴づけている崇高さ、宗教的感情的素直な発露には、そんな状況も影響しているのだろう。

ハースやノヴァークの校訂版が普及した現在、スコアをカットしたり書き換えたりしたブルックナーの弟子たちの行いは冒涇^{ぼうとく}のように見られているが、師の芸術を広めようとした彼らの努力も忘れてはなるまい。第7番に関しても1883年にはヨーゼフ・シャルクとフランツ・ツォットマンがすでに完成していた第1・3楽章を、翌84年2月にはフランツ・シャルクとフェルディナント・レーヴェが全曲を2台ピ

アノで試奏している。彼らの働きかけがライプツィヒの指揮者アルトゥール・ニキシュを動かし、同年12月30日の全曲初演が実現するのである。

楽章間にも大きな拍手が起きたといわれる初演は、大成功のうちに終わった。翌85年3月にはヘルマン・レーヴェの指揮でミュンヘンでも演奏され、ワーグナーの庇護者だったルートヴィヒ二世への献呈も実現する。86年に入るとケルン、ハンブルク、グラーツと再演の波は各地に広がり、とうとう地元ウィーンでもハンス・リヒターの指揮のもと第7番が鳴り響く。苦杯をなめ続けてきたブルックナーは、^{よかい} 60を超えようやくゆるぎない名声を手にしたのである。

第1楽章 アレグロ・モデラート 弦のトレモロのしじまを、ホルンとチェロが幅の広い歩みで2オクターブにわたって上行する。“ブルックナー開始”と呼ばれる始まりの中でも、もっとも清々しいものと言えよう。第2主題はこれと対照的になだらかな上行を繰り返す旋律で、ホルン、トランペットの刻みに乗ってオーボエとクラリネットに現れたのち、音色を変え逆行形となったりしながら反復される。勢いを増して頂点を迎えた後、弦の鋭いリズムで木管が下行を繰り返す第3主題が

現れ、この三つのテーマで展開される。**第2楽章** アダージョ 4本のワーグナー・チューバとヴィオラの旋律で重苦しく始まり、弦楽合奏がテーマを決然と歌う。ヴァイオリンによる回顧的な気分を湛えた第2主題は、高音域へと官能的に駆け上る。これらの主題が様々に展開され、やがて第1主題が弦の6連音符に乗って帰ってくると、音勢を増しながら輝かしいクライマックスを形成する。ワーグナー・チューバによる葬送音楽が歌われ、フルートと弦がこだまをかわして静かに消えていく。

第3楽章 スケルツォ リズム動機に乗ってトランペットとクラリネット、ヴァイオリンが呼び交わす。長調へと転じテーマが様々に色づけされたのち、冒頭部が反復される。トリオはティンパニのリズムに導かれ、弦が厚みのある豊かな旋律を聴かせる。

第4楽章 フィナーレ スキップするような主題は、第1楽章第1主題に付点音符をつけて変形したもの。第2主題はこれとは対比的にターン(回音)を含むコラール風のなだらかな調子をもち、各所でエネルギーを爆発させる第1主題とコントラストをなしている。コーダでは冒頭主題が第1楽章第1主題へと変容し力強く曲を閉じる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ワーグナー・チューバ4、ティンパニ、打楽器(シンバル、トライアングル)、弦五部